ISSN 2186-5647

5-20

カンポン住居の変容プロセスに関する考察

日大生産工(院)　○古田　莉香子　　日大生産工　山岸　輝樹
日大生産工(非常勤)　布野　修司　　日大生産工　広田　直行

1.　はじめに

1.1　研究の目的と背景

インドネシア・スラバヤにはカンポンと呼ばれるアーバン・ビレッジ（都市村落）がある。東南アジアなどの発展途上地域に多くみられるアーバン・ビレッジなどの居住地区は、近年急速に進行する都市化によって、多くが消滅している。しかしカンポンは、1980年代から現在にかけて、時代によるライフスタイルの変化や、都市化の波に影響を受けながらも、カンポン独自の形態とコミュニティ組織を保持し続けている。

本稿は、スラバヤの3つのカンポンを対象とし、1983年から2018年のおよそ35年のカンポン住居の変容プロセスを明らかにすることを目的とする。

1.2　調査の概要

調査は街区調査と住宅調査からなる。街区調査は、施設、建物用途、階高、構造の分布を明らかにする。住宅調査は、世帯主へのインタビューと住戸の実測調査からなる。調査項目は、世帯構成(年齢・職業・収入)出身地、前住所、所有形態、アリサン組織）である。いずれも1983/84年、2006年に調査が行われており、原則として同じ住戸を選定し、同じフォーマットを用いて行った。2015～17年の調査は、カンポン・ウジュンはRW(町内会)11の40世帯（1984：64世帯、2006年54世帯）、カンポン・サワハンはRW11の15世帯、（1984年：24世帯、2006年：19世帯）、カンポン・ドノレジョの32世帯（1984年：52世帯）である。

調査期間は2015年7月19日～31日、2016年7月24日～30日および2017年12月22日～27日である。また、2018年8月17日～19日に補足調査を行った。

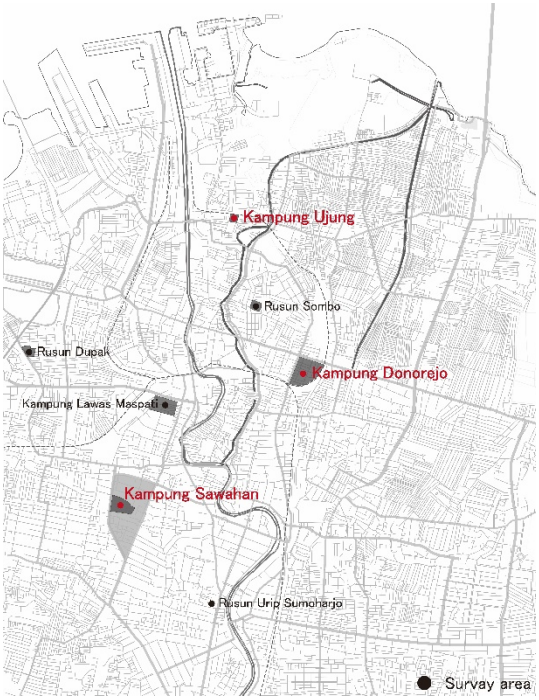

図１　調査対象地区

2.　3つのカンポンの変容

2.1　カンポン・ウジュン

概要

カンポン・ウジュンは北スラバヤの港湾地域に位置し、クチャマタン・スマンピル、クルラハン・ウジュンに属す高密度なカンポンである。港湾労働など仕事を求めて流入してきたマドゥラ人を中心とする人々によって形成されたカンポンである。定住率が高く、貧困世帯数が最も多い地区でもある。

住居の変容

1984 年に、既に全体は建て詰まった状況にある。1984 年に 2 階建は一部 2 階を含め 5 戸であったが、2006 年は 22 戸、2016 年は 25 戸にまで増加し、2006 年までで既に大幅に垂直方向への拡張がみられている。家内工場や店舗は 1984 年に 19 戸あるが、2006 年には店舗は 2 戸のみ、2016 年に 17 戸と再び増加している。また、1984 年にあった家内工場は、現在は存在しない。生計の手段が不安定であることを示している。住戸について、1984 年から大きな変化はなく、前面道路に面した住戸の一部に若干の増改築がうかがえるが、今もなお建て詰まりであることは変わらない。

2.2　カンポン・サワハン

概要

サワハンは都心部のクチャマタン・サワハン、クルラハン・サワハンに属するカンポンである。スラバヤ市のほぼ中央の中心繁華街から1kmの

Consideration on transformation process of kampung housing
Rikako FURUTA, Teruki YAMAGISHI, Shuji FUNO and Naoyuki HIROTA

距離にある。1910年頃にヨーロッパ人居住地として開発された都心部カンポンの典型である。

3つのカンポンの中で世帯主の平均年齢が最も高く、高齢化が進行するカンポンである。

住居の変容

2006 年から 2016 年にかけて、2 階建ては一部 2 階を含めて、73 戸から 161 戸へ、88 戸増加している。3 階建ては 1984 年には見られなかったが、2006 年には 3 戸、2016 年には 7 戸、さらに、4 階建てが 1 戸みられる。全体は建詰まっており、住戸面積の拡大要求は他のカンポンでも一般的傾向である。

調査した住戸すべてで、住居の大幅な変化はない。居室の一部を学習塾として使用する住居など多少の間取りの変化はあるが、大きな規模の変化はない。しかし、住居の一部を間貸ししているものや貸家、空き家が増えつつある。間借りしている世帯の多くが、年齢が若い世帯で比較的低所得者層である。空き家が増加し、さらに空洞化していくことになれば、再開発圧力にどう対処するかが今後の課題となってくる。

2.3　カンポン・ドノレジョ

概要

カンポン・ドノレジョは、都心部の中スラバヤの北東部に位置し、クチャマタン・シモクルト、クルラハン・カパサンに属するカンポンである。クンジェラン通りとドノレジョ通りという 2 つの幹線道路と鉄道線路に囲まれている。カンポン・ウジュンとカンポン・サワハンの中間にある下町的カンポンである。

3 つのカンポンの中で若い世代とくに 20 代の割合が多い。しかし、世帯人数が大幅に減少しているカンポンである。

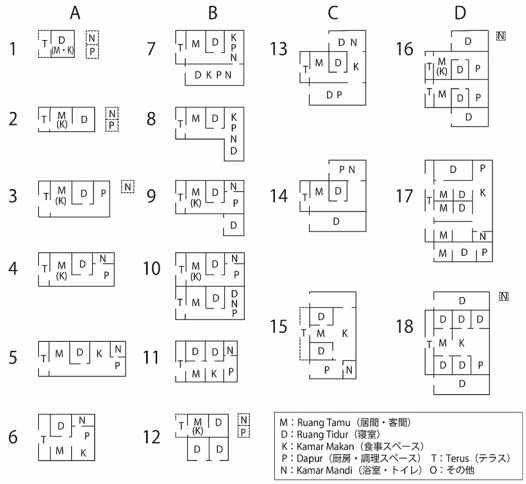

図 2　平面類型

住居の変容

1984 年は調査住戸 53 戸のうち 48 戸が平屋であるが、2017 年の調査住戸の 3 分の 1 は 2 階建てとなっている。住戸規模は、平均 52.38 ㎡（持家平均 59 ㎡・借家平均 34 ㎡）である。1984 年時の調査では、平均 56.98 ㎡（持家 61.56 ㎡・借家 42.86 ㎡）であり、大きな変化はない。線路沿いに立地する住居は全体的に狭小である。線路は現在も使われており、定期的に貨物列車が通過する。線路沿には住居や多くのあふれ出しがあり、隙間はわずかで危険である。

3.　カンポン住居の変容プロセス

カンポンの住居は、棟の数または間口のスパン（柱間）数について A～D（1～4 スパン）に分けられ、以下の基本的空間要素によって、18 の平面類型に分けられる[参1)]（図 2）。M：居間・客間、D：寝室、K：食事スペース、P：厨房・調理スペース、N：浴室・トイレ、O：その他（店舗、工場、作業スペースなど）。

ウジュンでは、最も標準形である A5 タイプまたは間口が 2 スパンや 3 スパンの水平方向に住居が広がる B10 や B11 タイプが多くみられる。サワハンでは、A タイプや A タイプに居間や寝室などが独立した形で付加されている B タイプがみられ、間口が 3 スパンや 4 スパンなど水平方向に広がる規模の住居はない。ドノレジョではワンルームの A1 タイプが最も多く、3 スパン以上の規模の大きな住居はない。

平面類型の変化をみると、全体では変化のない住居は 75 戸、拡大した住居は 9 戸、縮小した住居は 6 戸である（表 1）。ほとんどの住居で平面類型に変化はなく、特にサワハンではすべての住居で変化がない。

ウジュンでのみ拡大した住居が 9 戸みられ

表 1　平面類型の変化

	ウジュン	サワハン	ドノレジョ	計
変化なし	43	13	19	75
拡大	9	-	-	9
縮小	1	-	5	6
計	53	13	24	90

表 2　住居変化

		ウジュン	サワハン	ドノレジョ	計	
変化なし		7	4	1	12	
建替	1F	16	1	6	23	35
	2F	6	-	6	12	
増改築	奥行	1	-	2	3	43
	水平	3	1	1	5	
	垂直（2F）	3	-	3	6	
	内装	17	7	5	29	
計		53	13	24	90	

る。家族数の増加や生活様式の変化から拡大しているといえる。さらには建詰まりの中で敷地を確保することが難しいことから、サワハンやドノレジョでみられるような、垂直方向への住居の拡大が行われることは一般的であるといえる。

また平面類型の変化において変化後のタイプをみると、ウジュンではBタイプへの変化が多いのに対して、ドノレジョではAタイプへの変化が多い。さらに縮小する5戸のうち、平面類型が最小のA1タイプに縮小する住居が3戸ある。これは住まい方の変化や、単身者世帯の増加が、住居の縮小の要因であるといえる。特にドノレジョでは、事例E、Y、G'（図3）のように、住居の一室に大家として住まい、部屋を賃貸する住戸もある。

また、カンポン住居の変容パターンは大きく3つ、奥行方向への増築パターン、水平方向に棟を並べていく増築パターン、垂直方向へ増築するパターンに分けられる。

調査した全住居90戸(ウジュン53戸、サワハン13戸、ドノレジョ24戸)についてみると、建替えられた住居が35戸、増改築が行われた住居が43戸、変化のない住居が12戸である（表2)。増改築の行われた43戸のうち、垂直方向(2階)への増改築が6戸、水平方向(間口)の増築が5戸、奥行きの増改築が3戸、外観に大きな変化はないが内装に変化があった住居が29戸である。

3つのカンポンに調査件数の違いはあるものの、それぞれのカンポンをみると、ウジュンでは、建替えによる変化が22戸と最も多い。次いで、内装の変化が17戸である。

サワハンでは、内装の変化が7戸と最も多いが、4戸で変化がなく、建替えが行われた住居は1戸のみである。

ドノレジョでは、建替えによる変化が12戸と最も多い。次いで内装の変化が5戸である。一方、変化のない住居は1戸のみであり、他のカンポンと比べて、ほとんどの住居に何らかの変化がみられる。

カンポンでは、住居を必要に応じて、建替えたり、居住者による増改築が繰り返し行われたりすることで変化をしながらつくられる特性を持っている[参1)]。そのため、ウジュンのような定住率の高いカンポンでは建替えなどの変化がみられる住居が多い。一方サワハンのような都心部に位置するカンポンでは、居住者の移り替わりも多いことから、住居の変化も少ないと言える。

また先進都市では、住居の更新が行われる際、多くの場合、高層マンションや賃貸アパートが建設され、高密度の居住が行われる。しかし、カンポンでは、高層マンションなどの集合住宅の建設は郊外の特定の地区を除いて行われていない。カンポンでは一定の更新パターンによって住居は変容してきており、低層高密の居住環境は維持されてきているといえる。

4. まとめ

本稿で明らかにした主要な点をまとめると以下のようになる。

3つのカンポンのおよそ35年間の変化をみると、北部のカンポンであるウジュンでは、人口密度がいまだに高く、貧困世帯も一定層存在する。一方で、都心部のサワハンでは依然として住居の高層化が進んではいるものの、高齢化が進行し、空き家の増加、住居の間貸しなどが目立ってきており、単身者世帯も一定数存在している。下町的なドノレジョでは、空間構成に大きな変化はないものの、世帯人数の減少、若い世代の増加がみられる。

平面類型についてはこの間大きな変化はない。すなわち、新たな類型の発生はみられない。また、住居の変容パターンも大きな変化はないが、世帯人数の変化や単身世帯の増加などから、間貸しや、住居規模の縮小がみられる。カンポンの特性によって、建替えや増改築などの変化は異なるが、いずれのカンポンでも高密度に建て詰まっており、敷地の確保は難しいことから、大きく規模を拡大する住居は少ない。すなわち、住居類型およびその変容パターンとも、布野(1987)の示した1983/84年時分析と大きな変化はない。カンポンでは、一定の住居の更新パターンが成立していることを指摘することができる。

参考文献

1）布野修司：インドネシアにおける住居環境の変容とその整備手法に関する研究ーハウジングシステムに関する方法論的考察ー、学位請求論文(東京大学)、1987

2）布野修司、高橋俊哉、川井操、チャンタニー・タランタナット：カンポンとカンポン住居の変容(1984-2006)に関する考察、日本建築学会計画系論文集、第74巻、第637号、pp593-599、2009.3

3）平野敏彦、布野修司、太田邦夫、上杉啓、前田尚美、内田雄造、浅井賢治、勝瀬義仁：東南アジアの住居と居住環境に関する研究その27 -カンポンの変容過程とKIPの評価その5 Kampung Sawahan-、日本建築学会学術講演梗概集、No.5060、pp119-120、1985.9

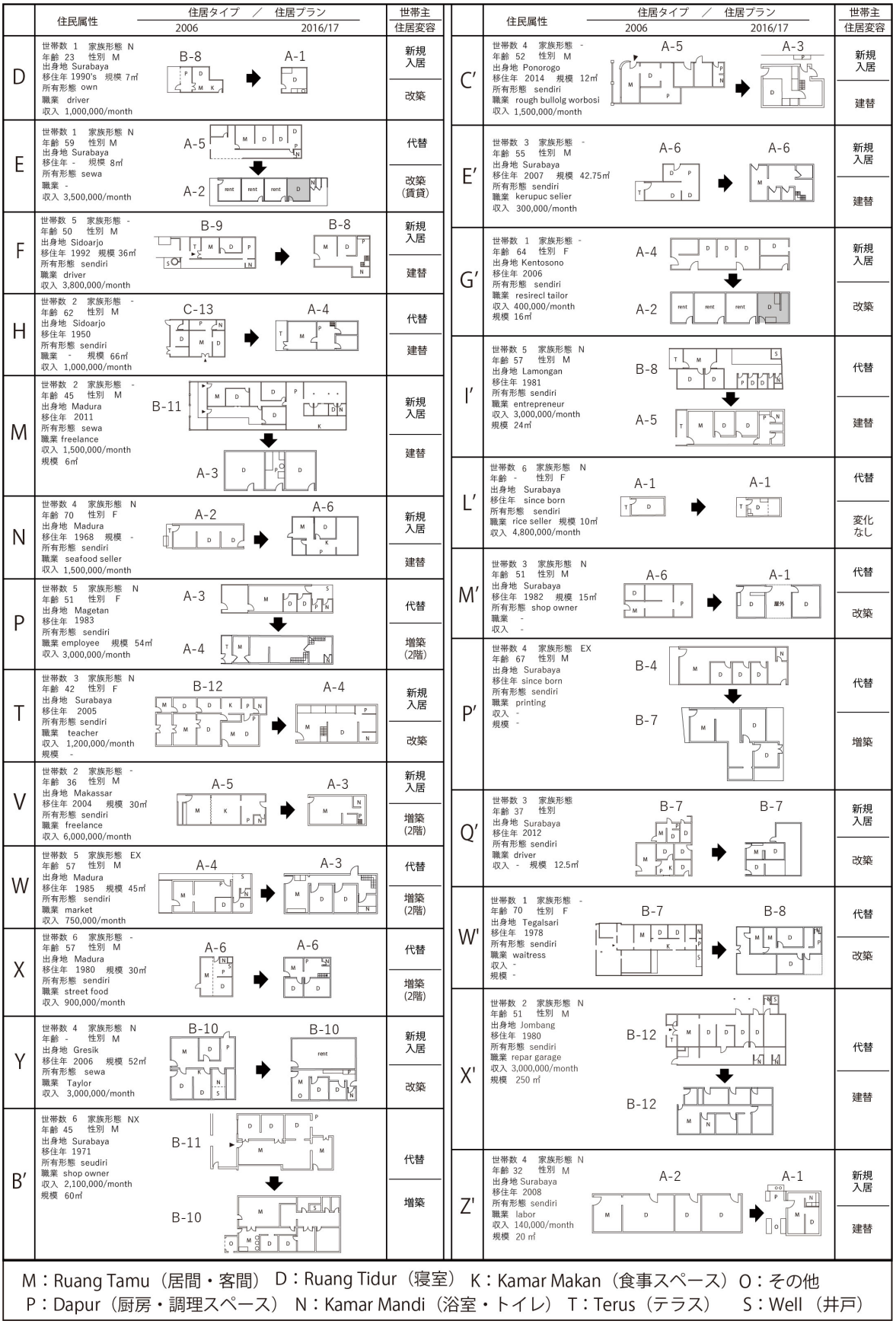
住民属性
住居タイプ ／ 住居プラン
2006
2016/17
世帯主
住居変容
D
世帯数 1 家族形態 N
年齢 23 性別 M
出身地 Surabaya
移住年 1990's 規模 7㎡
所有形態 own
職業 driver
収入 1,000,000/month
B-8
A-1
新規入居
改築
E
世帯数 1 家族形態 N
年齢 59 性別 M
出身地 Surabaya
移住年 - 規模 8㎡
所有形態 sewa
職業 -
収入 3,500,000/month
A-5
A-2
代替
改築（賃貸）
F
世帯数 5 家族形態 -
年齢 50 性別 M
出身地 Sidoarjo
移住年 1992 規模 36㎡
所有形態 sendiri
職業 driver
収入 3,800,000/month
B-9
B-8
新規入居
建替
H
世帯数 2 家族形態 -
年齢 62 性別 M
出身地 Sidoarjo
移住年 1950
所有形態 sendiri
職業 - 規模 66㎡
収入 1,000,000/month
C-13
A-4
代替
建替
M
世帯数 2 家族形態 -
年齢 45 性別 M
出身地 Madura
移住年 2011
所有形態 sewa
職業 freelance
収入 1,500,000/month
規模 6㎡
B-11
A-3
新規入居
建替
N
世帯数 4 家族形態 N
年齢 70 性別 F
出身地 Madura
移住年 1968 規模 -
所有形態 sendiri
職業 seafood seller
収入 1,500,000/month
A-2
A-6
新規入居
建替
P
世帯数 5 家族形態 N
年齢 51 性別 F
出身地 Magetan
移住年 1983
所有形態 sendiri
職業 employee 規模 54㎡
収入 3,000,000/month
A-3
A-4
代替
増築（2階）
T
世帯数 3 家族形態 N
年齢 42 性別 F
出身地 Surabaya
移住年 2005
所有形態 sendiri
職業 teacher
収入 1,200,000/month
規模 -
B-12
A-4
新規入居
改築
V
世帯数 2 家族形態 -
年齢 36 性別 M
出身地 Makassar
移住年 2004 規模 30㎡
所有形態 sendiri
職業 freelance
収入 6,000,000/month
A-5
A-3
新規入居
増築（2階）
W
世帯数 5 家族形態 EX
年齢 57 性別 M
出身地 Madura
移住年 1985 規模 45㎡
所有形態 sendiri
職業 market
収入 750,000/month
A-4
A-3
代替
増築（2階）
X
世帯数 6 家族形態 -
年齢 57 性別 M
出身地 Madura
移住年 1980 規模 30㎡
所有形態 sendiri
職業 street food
収入 900,000/month
A-6
A-6
代替
増築（2階）
Y
世帯数 4 家族形態 N
年齢 - 性別 M
出身地 Gresik
移住年 2006 規模 52㎡
所有形態 sewa
職業 Taylor
収入 3,000,000/month
B-10
B-10
新規入居
改築
B′
世帯数 6 家族形態 NX
年齢 45 性別 M
出身地 Surabaya
移住年 1971
所有形態 seudiri
職業 shop owner
収入 2,100,000/month
規模 60㎡
B-11
B-10
代替
増築
C′
世帯数 4 家族形態 -
年齢 52 性別 M
出身地 Ponorogo
移住年 2014 規模 12㎡
所有形態 sendiri
職業 rough bullolg worbosi
収入 1,500,000/month
A-5
A-3
新規入居
建替
E′
世帯数 3 家族形態 -
年齢 55 性別 M
出身地 Surabaya
移住年 2007 規模 42.75㎡
所有形態 sendiri
職業 kerupuc selier
収入 300,000/month
A-6
A-6
新規入居
建替
G′
世帯数 1 家族形態 -
年齢 64 性別 F
出身地 Kentosono
移住年 2006
所有形態 sendiri
職業 resirecl tailor
収入 400,000/month
規模 16㎡
A-4
A-2
新規入居
改築
I′
世帯数 5 家族形態 N
年齢 57 性別 M
出身地 Lamongan
移住年 1981
所有形態 sendiri
職業 entrepreneur
収入 3,000,000/month
規模 24㎡
B-8
A-5
代替
建替
L′
世帯数 6 家族形態 N
年齢 - 性別 F
出身地 Surabaya
移住年 since born
所有形態 sendiri
職業 rice seller 規模 10㎡
収入 4,800,000/month
A-1
A-1
代替
変化なし
M′
世帯数 3 家族形態 N
年齢 51 性別 M
出身地 Surabaya
移住年 1982 規模 15㎡
所有形態 shop owner
職業 -
収入 -
A-6
A-1
代替
改築
P′
世帯数 4 家族形態 EX
年齢 67 性別 M
出身地 Surabaya
移住年 since born
所有形態 sendiri
職業 printing
収入 -
規模 -
B-4
B-7
代替
増築
Q′
世帯数 3 家族形態
年齢 37 性別
出身地 Surabaya
移住年 2012
所有形態 sendiri
職業 driver
収入 - 規模 12.5㎡
B-7
B-7
新規入居
改築
W′
世帯数 1 家族形態 -
年齢 70 性別 F
出身地 Tegalsari
移住年 1978
所有形態 sendiri
職業 waitress
収入 -
規模 -
B-7
B-8
代替
改築
X′
世帯数 2 家族形態 N
年齢 51 性別 M
出身地 Jombang
移住年 1980
所有形態 sendiri
職業 repar garage
収入 3,000,000/month
規模 250 ㎡
B-12
B-12
代替
建替
Z′
世帯数 4 家族形態 N
年齢 32 性別 M
出身地 Surabaya
移住年 2008
所有形態 sendiri
職業 labor
収入 140,000/month
規模 20 ㎡
A-2
A-1
新規入居
建替
M：Ruang Tamu（居間・客間） D：Ruang Tidur（寝室） K：Kamar Makan（食事スペース） O：その他
P：Dapur（厨房・調理スペース） N：Kamar Mandi（浴室・トイレ） T：Terus（テラス） S：Well（井戸）

図 3 住居変容の事例